〈高校生の部　佳作〉

サラブレッドとみる夢

仁愛女子高等学校　川原　梨花

広い馬場を颯爽と駆け抜け、大きな障害を何の躊躇もなく飛び越えていく。目が離せなかった。まさに「人馬一体」。そのときのあの姿が私の心を掴んで離さない。

私は、そんな姿に憧れを抱いて乗馬を始めた。初めて馬に乗った日は、想像以上の高さと揺れに恐怖を感じ、「やっぱり私には無理かも」と何回も思った。それでも、あの日見た「人馬一体」への憧れを捨てきれず、乗馬を続けることにした。

もちろん、ドがつくほどの初心者の私の騎乗は憧れからは程遠く、思い通りにいかないことの方が遥かに多い。まっすぐ走らせることができない、曲がりたいときに曲がれない、馬の動きについていけない、課題は絶えず存在している。ひどい時は私が乗ったままの状態で馬場の端に生えている草を食べ始めたこともある。回数を重ねて少しずつマシになったかな、そう思って毎週クラブに通っている。

私が乗馬を続ける理由はもう一つある。それは、「全ての馬の未来を明るくすること」。乗馬を始めたばかりの私にとって、先生は人だけではない。私を乗せてくれる馬たちも先生である。皆が先生で、皆が愛馬と呼べる存在だ。といっても、彼らは乗用馬として生まれてきた馬ばかりではなく、大半は競走馬として生まれてきた馬だ。競馬を引退したあと、繁殖に上がらなかった馬の一部が再調教を経て、乗用馬になる。しかし、多くの馬がそうなるかと言われればそうではなく、ほとんどの馬が殺処分される。人間の都合で生産され、人間の都合で天寿を全うすることなく命を失う馬がたくさんいる以上、馬と関わって生きる人間として見て見ぬふりはできない。とはいえ、無力な私に何ができるかと言われれば、これといってできることは特になく、強いて言うならば乗用馬として生きる彼らに愛情を注ぐこと、引退競走馬を支援する団体に寄付をすることくらいだ。馬が生きていくためにかかるお金は決して安いものではない。その金額を賄うためには、乗用馬になることが一番早い道なのだろうが、競馬を引退した全てのサラブレッドが乗用馬になることは非現実的で、殺処分から救うことができるのは限られた一部の馬だけだ。「全ての馬の未来を明るくする」そんな夢を持ちながらも、具体的にどうすればよいのかなど、全くもって想像がつかない。

私は数えきれないほど多くのことを馬に教えられた。運動が嫌いだった私にからだを動かす楽しさを教えてくれたのは間違いなく馬である。休みの日は部屋に籠っていた私が、電車を乗り継いで、自転車を漕いでクラブに通うようになった。馬という存在に出会えてなか

ったら、きっと今も休みの日は、部屋で一日中寝て過ごしていただろう。そして何より、彼らは命の尊さを教えてくれた。つい数日前まで元気だった彼はある日突然、天へと旅立った。そんな芦毛の彼は私にたくさん乗馬を教えてくれた。今、思い返してみると、彼は素直で優しくて、心強い存在だった。私が初めてのことに挑戦するときは、いつも彼がパートナーで、彼と一緒なら新しいことでもできる気がした。雨の日は機嫌が悪くて少しわがままで、でもそんなところも含めて彼が大好きだった。あまりに突然の別れで、簡単に受け入れられるものではなかった。もっとにんじんあげればよかったな、なんて思いながらにんじんとりんごを抱えてクラブに行くと、彼の馬房には祭壇があった。いつも彼がいたその場所に彼はいなくて、そこにあるのは写真とお供えもの、線香、蹄鉄、たてがみとしっぽ、そしてたくさんのハエ。死を実感させられて、涙がこみ上げてきた。もう彼に会うことはできないんだ、そう思うと、生きていることは当たり前のことじゃなくて、不思議で儚くて、奇跡なんだって思った。それ以来、相手が誰であっても、いつその別れが訪れても後悔しないように、一日一日を大切に過ごしている。馬から乗馬以外のことを教えられるなんて思ってなかったな、たくさん教えてくれてありがとう。

私の夢は一頭でも多くの馬を救うこと。そして、一緒に成長して、競技会に出て、たくさんのブルーリボンを掴むこと。今の私には、勇気も技術も足りていない。だから私は馬に乗り続ける。いつか、引退競走馬を救い、共に夢を掴むために。その「いつか」が少しでも早くなるように。